

06・わたしの気持ち

トラック05の十数分後。
とある年の春。

五月十三日。朝七時半ごろ。

場所は主人公とシーラが本日宿泊する、高級ホテルの浴室。
天気は晴れ。室温は二十四度程度。

主人公、まだ裸のままシーラに膝枕をされ、ベッドに寝そべっている。
だが、そろそろ朝食が運ばれてくる時刻だろう。
もう起きて、着替えなくてはならない。

舞台はとても広いホテルの一室。

S E 1 外で鳥が鳴く声

【最初から途中まで流す】

【建物の中から、小さく聞こえる】

【0—5秒ほど流してフェードアウトする】

SE2　主人公が身体を動かす音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「そろそろ……起きなきやかな……」

※ここから『主人公が起き上がる』まで、シーラは主人公に膝枕した状態で話している。

●正面　【※50センチほど上※】30センチ

「穏やかに、だが、少し名残惜しそうに。

シーラもまだこのまま、主人公と過ごしたいので
ええ……そろそろホテルの方が、朝食をお持ちになられます。
私（わたくし）達も、支度を始めましょうか」

〈主人公〉

「早いわねえ……」

主人公、仰向けになつてシーラの膝に甘えながら、

……もう時間かあ。

なんだかちよつと、現実に引き戻される気分だ。

一生シーラと二人きりで、ひたすらにいやいやできればそれが一番幸せな気がするのに、現実はそうはいかない。

シーラと幸せになるためには、シーラと一緒にいる以外の事を、たくさん頑張らなくちやいけないんだ。

わかつちやいるけど、それが当然なんだけど。時々それが淋しいなあ……。

と思う。

主人公は仕事も学校も好きだし、生活の中のたくさんの事にやりがいを感じている。だが、やはりシーラの存在は別格なのだ。

できればずっと、シーラと二人きりで居たい。ずっと、シーラとの行為に溺れていたい。そう思つてしまふ事があるのだ。

「穏やかに、だが、少し名残惜しそうに。

シーラもまだこのまま、主人公と過ごしたいので
ええ。楽しい時間はあつという間でござります。

【少し間をあけてから。】

帰宅後の予定について確認する】

ご帰宅されてからは、予定通り篠田様とのプロジェクトの準備をされますか?】

△主人公△

「うん、そのつもり。

あんま時間ないけど、出来る限りの事はしたいしね」

だから主人公は、シーラもまた、同じ気持ちでいてくれたら嬉しいと思う。

⋮⋮しかし、もしさうだとしても、そうでないとしても。

今の自分たちの関係は、少々密着しすぎてはいないうだろうか。
と、考える事もある。

確かに主人公の仕事もあり、以前よりは別行動する時間が増えた。

それでもシーラは、いつでも主人公が望めば必ずそばに居てくれるし、ボディーガード
という職業柄、主人公の隣にいる事を最優先としている。

だが、いつも必ずそうする必要があるだろうか、という気もする。

たとえば、他にもボディーガードに準する者がいる場にも、無理にシーラを同行させる必要はあるだろうか？

たとえば、シーラが彼女の意思で積極的に何か学んだり、経験を積んだりしたいと思つて いるのに。

主人公が『単にそばに居てほしいから』という理由で、彼女の行動を制限してもいいの だろうか？

そんな恋人関係は……ちゃんと持続して……いけるのだろうか……？

と、思う事もあるのだ。

●正面　【※50センチほど上※】30センチ

「穩やかに優しく。

名残惜しい気持ちから『メイドモード』に切り替えようとしている。

『篠田様は、今回初めてお会いする方ですし、私も居た方が良いでしょ』と言おうと
して途切れる】

承知しました。

打ち合わせ当日は、私（わたくし）も同席致しますね。

篠田様は、今回初めてお会いする方ですし……」

「主人公」

「あ、その件なんだけどね！ シーラは同席しなくてもいいよ」

だから主人公は、いつもと違う提案をしてみる事にした。
もちろんこんなのは淋しいに決まっているが、あえて言つてみたのだ。

S E 3　主人公がベッドから起き上がる音

【最初から最後まで流す】

※ここで、主人公が起き上がる。

●正面 30センチ

「虚を突かれて。

予想だにしない答えだつたので】

……え？」

（主人公）

「今日は篠田さんにうちまで来てもらう訳だし。

ボディーガードの仕事は、特にないと思うんだよね。

だから、考えたんだけどさ。

シーラは自由にしてていいよ。

たとえば、さつき言つてた、志保達の勉強会に一緒に行くとか。

もちろん、シーラも興味あればの話だけど……」

もちろん主人公はこれを、己の自立のつもりで、シーラを思つてのつもりで。

そして、今後の自分達の関係を考慮してのつもりで発言した。

だがそれゆえに、主人公は気づかない。

シーラが今、珍しい位動揺していて、主人公の言葉を、とても淋しく感じている事を。

●正面 30センチ

「ほんの少し残念そうに。

驚いていて、うまく感情を隠しきれないという感じで。

だが、それでも概ね感情を抑えられているため、主人公は気づかない

然様（さよう）でございますか……」

△主人公

「どうかな？」

●正面 30センチ

「穏やかに優しく。

もう気持ちを切り替えて『メイドモード』になつている。

シーラはこれが、主人公なりの配慮であり、今後の事を考えてのものだと理解している
ので。

また、決して自分の事を不要だから言つたわけではないとわかつているので。

だが、それでも内心は少し淋しい。

大人びた女性として振る舞つても、シーラはまだ十代で、恋人である主人公に深い
愛情と執着を寄せているので】

そうですね。仰る通りです。

……では、お言葉に甘えて。

今回は同席せず。

私（わたくし）も、志保達と勉強会に行こうかと思います。

折角ですから、私（わたくし）も見聞を広めて参りますね」

△主人公

「ほんと、!?」

主人公が思わず身を乗り出ると、シーラが微笑んだ。

その笑顔はいつものシーラそのもので、主人公はその奥にある思いを、すっかり見落としてしまう。

●正面 30センチ

「穏やかに優しく。

もう気持ちを切り替えて『メイドモード』になつている】

ええ。私（わたくし）も。

少しでもお嬢様にふさわしい存在になりとうございますから】

△主人公

「むふふ。さつすがあ。やっぱシーラは頼れるう」

●正面 30センチ

「穏やかに優しく。

もう気持ちを切り替えて『メイドモード』になつている】

ふふ。ありがとうございます。

そう仰つていただけて、嬉しい限りでございます」

（主人公）

「んー♥」

●正面 0センチ

「〔※2回※ キスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス】

ん……ちゅっ♥」

主人公、シーラが前向きな事が嬉しくて、思わず身を寄せてキスをする。

シーラはもちろんこれを受け入れてくれ……二人の関係は、今日も何の問題もないよう
に見えた。

シーラ、主人公の左耳に唇を寄せ、ささやく。

これによつて声の方向が『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく

「[穩やかに優しく]

では……お嬢様。お着替えを致しましようか。　※

【※1回※　耳にキスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス】

ちゅ　♥　】

ここでフェードアウトして終了。